

私の授業「アジア建築史」

川井 操

環境建築デザイン学科

現在、専門科目で担当する授業は「アジア建築史」であり、2014年度から担当している。先任の布野修司先生が本学に着任された2005年に開設された講座である。布野修司先生は私の博士後期課程の指導教官であり、学生時代にはこの授業を受講したり、代役として講義をおこなったこともあり、馴染みや個人的に思い入れのある授業であった。授業準備には、未だに苦勞しているが、勉強することや新しい知見を手に入れること楽しんで取り組んでいる。

2016年度の講義内容は以下の通りである。

1. 伊東忠太と東洋建築
2. ヴァナキュラー建築の世界①
3. ヴァナキュラー建築の世界②
4. 仏教建築の世界史①
5. 仏教建築の世界史②
6. 中華の建築世界①
7. 中華の建築世界②
8. 中国都城論
9. ヒンドゥーの建築世界①
10. ヒンドゥーの建築世界②
11. ヒンドゥー都市論
12. イスラーム世界の都市と建築①
13. イスラーム世界の都市と建築②
14. 植民都市建築史①
15. 植民都市建築史②

講義のフレームは、布野修司編『アジア都市建築史』(昭和堂)と日本建築学会編『東洋建築史図集』(彰国社)である。授業で心掛けていることは、自らの実体験やフィールド調査を行なったエリアを話すようにしている。これまで私は中国を主にしてフィールド調査、都市研究を重ねてきたこともあって、中国都市建築史が話の主題となる。特に北京の紫禁城については、丸々一回分の時間を当てている。中国が如何に王権国家としてヒエラルキカルに建築構法や意匠、配列、高さが決定付けられているのか、そのことを伝えるのに最もわかりやすい事例だからである。

一方で訪れたことのない世界を伝えることは難し

いが、近年は東南アジアにも訪れる機会が増えてきて、ようやくヒンドゥーや植民都市の世界も実感を持って話せるようになってきた。特に昨年度にアンコールワットを訪れたことで、信仰の対象として祀られた神々の世界をスライドで伝えられるようになった。また木造建築に影響を受けたヒンドゥー世界の石造建築の独自性を臨場感を持って伝えた。

授業上の工夫としては、写真や映像を積極的に使ったり、実際に図面や構法を手で描いて考える時間を設けている。特に映像は実際の現地の臨場感を伝えるには適していると実感するところである。この授業では、学生たちには、西欧社会の近代建築主義とは異なる、我々の身近な存在としての東洋概念やそれに投影された建築世界を感じてもらい、伝えることを意図している。さらに現地に足を運んでアジアの壮大な建築体験してほしいと願っている。



* 図 _ 紫禁城・太和殿